



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	「育児期の母親の心理および生活とソーシャル・ネットワークの活用」
Author(s)	岩田, 美香
Citation	北海道大學教育學部紀要, 64, 93-96
Issue Date	1994-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29440
Type	departmental bulletin paper
File Information	64_P93-96.pdf



「育児期の母親の心理および生活と ソーシャル・ネットワークの活用」

岩 田 美 香

How Mothers Raise their Quality of Life and Cope with Childrearing Problems through Social Networks ?

Mika IWATA

I. 問題と目的

現代は、子育てが難しくなってきたと言われるが、その背景には、社会・経済状況の変化がある。一方、母親の側にも、高学歴化、さらにライフ・スタイルや価値観の多様化により子育ての価値が相対化されてきている。実際、近年の出生率の低下はすさまじく、また、子どもをもっている母親にも、わが子を可愛く思えなかったり、極端な場合には児童虐待のケースも報告されている。育児不安や育児ノイローゼといった、母親の育児に対するネガティブな感情が、すぐに、極端なケースにつながるものではないが、予防的な立場からも育児行動における危険因子を探っていく必要性があると思われる。

そうした中で注目されるのは、母親たちが、家族を越えた新しい関係を作りだそうとしていることである。その関係は、特に目新しいものではなく、従来の地域における母親同士の関係と同じものであるかもしれない。しかし、金子（1986）のいう「主体性をもった個がそれぞれの自由意志で自発的に参加したまとまりであり、……互いの違いを主張し合いながらも何らかの相互依存関係をもつ」また、その結果、「自分が自分であることのエネルギーを他の人から授かることを可能にする」という点に注目し、本研究では「ネットワーキング」という視点から母親のもつ社会関係を考察していく。母親の「主体性」に注目することにより、従来は黙っていても組み込まれていた地域との関係も、新たに作り出す関係として捉え直すことができると考えるからである。

これまでに、子どもの発達に影響を与える親の養育態度については、数多くの研究がなされてきたが、その養育者（日本では母親が中心であるが）についての社会的要因についての研究は、近年になってようやく注目されてきたところである（大日向，1991）。本論の主要な目的は、育児に関するネガティブな感情の構造を探ることと、それを規定し、あるいは緩和している要因を母親のネットワークに重点を置きながらみていくことにある。

II. 方法と手続き

【質問紙調査】

札幌市にある9つの全保健所を通して、3歳児健診で来所した母親に110項目にわたるアンケート用紙を配布し、後日郵送による回収を行った。947票を配布し、291票を回収した。

【面接調査】

291名の質問紙調査の対象者のうちで面接調査に応諾してくれた59名が調査対象者になった。その中で、連絡がとれない、子どもの病気などで調査が不可能になった15名を除いた44名が最終的な面接の対象者である。面接は調査協力者の自宅で実施したが、仕事をもっている2名の母親については職場の昼休みを利用して実施した。

【育児不安の測定】

母親の育児におけるストレスや不安の傾向について、本研究では、牧野(1982)の「育児不安尺度」を参考にしながら新たに作成したものによって測定した。彼女の育児不安尺度は、おおむね良好であると評価されているが、育児不安得点の低い母親については、本村(1985)が「子どもに関心の低い母親は、育児不安徴候を表しにくく、育児全般の問題を考える上では、こうした、無関心な母親の問題も決して無視できない」と指摘している。

こうした問題提起については、牧野自身も彼女の育児不安尺度についての問題点を指摘しているが、牧野は改訂作成については、いまだ手をつけていないのが現状であり、筆者は、指摘されている問題点をもとにしながら、19項目からなる新たな「育児不安尺度」を作成した。それらの項目を用いて主に尺度の等質性についての尺度分析を行った。

291名のデータについて因子分析をした結果、これまで「育児不安」として1次元を想定して測定されていたものから、f1「充実感欠如の因子」とf2「育児不安の因子」という2つの因子が抽出された。因子1と2の間には、中程度の相関があり、両者は、いずれも育児行動における危険因子(リスク・ファクター)を構成しているが、やや独立した因子とみなし、2つの側面を使って分析を行った。

Ⅲ. 結果と考察

今日の母親の育児ストレスの現状をみると、「子どもに対してイライラする」ことがある、「子どもを大声で怒る」ことがある母親は、ともに9割を越える高率である。さらに、「子どもに衝動的に手をあげてしまう」母親が6割を越えている。2つのリスク・ファクターf1「充実感の欠如」因子、f2「育児不安」因子と、こうした母親のストレスフルな育児行動とは、それぞれに有意な関連があり、ストレスフルな行動を多く出す母親は、その背後に心理的な充実感の欠如や育児不安をもっている傾向があった。

さらに、リスク・ファクターに関連する要因をみると、f1「充実感の欠如因子」に有意な関連のある要因は、「母親の社会参加」「ソーシャル・ネットワーク」「他児比較」「夫の協力」「夫の満足度」「夫の職業」「住居形態」であった。一方、f2「育児不安因子」については、「ソーシャル・ネットワーク」「他児比較」「夫の満足度」「家族構成」との関連が有意であった。

すなわち、母親が生活に充実感を感じなくなるのは、社会的な活動をしていない、親戚以外に世間話をする人が少なく家族ぐるみの付き合いも少ない、他の家の子どもと比較して気にしてしまう、夫の協力も少なく夫に満足していない、住居形態としては一戸建てよりも集合住宅、夫の職業では自営と常勤以外の仕事の場合である。一方、母親が育児不安を感じるのは、世間話や家族ぐるみの付き合いといったソーシャル・ネットワークが貧しい、他の家の子どもと比較して気にしてしまう、夫に満足していない場合である。また、家族構成では、父母子+祖父母といった拡大家族よりも父母子だけの核家族の方が育児不安を生じやすいのである。

母親の育児に対する感情の構造としては、f1「充実感の欠如」因子が、母親自身の生き方に

ついでに価値観や母親個人の日常生活といった母親自身の生活から生じる感情の側面、そして、f2「育児不安」が、子育ての価値観や母親の育児行動といった子どもとの関係で生じる母親の感情の側面で構成されている。

論文では、リスク・ファクターと関連があった要因の中から、主要なものを中心に考察していったが、中でも注目できる結果としては、母親が、自分の抱く悩みの中身によって、ソーシャル・ネットワークを使い分けていることが挙げられる。やはり、子どもの発達上の問題は、子育てを通して知り合った（Maternalな）友人に、そして母親自身の個人的な悩みは、母親役割に関係のない個人的な（Personalな）友人に相談していた。また、大まかな傾向としてであるが、妊娠期から現在へと経過するにしたがって、母親は自分で悩みを解決していくようになる。その際の「自分で解決する」というのは、「孤独に一人で」解決していくという意味ではない。母親たちは、日頃の何気ない付き合いをしていくうちに、それが結果として、大きな「悩み」となる前の予防的な役割を果たしているのである。やはり、母親は「自分は誰かに支えられている」という認知ができることで、日常の困難も乗り越えられるのであり、それは、大げさな「援助」といったものではなく、日常の何気ない付き合いの中にあるのである。

こうした母親の周囲にあるネットワークの中でも、特に母親が主体的に活動している「ネットワーキング」と、その対極にある社会的に孤立している母親とを対比しながら、それらの特徴を考察した。その結果、社会的に孤立している母親は、主に地域における母親の社会関係によってネットワークが形成しにくく、あえて個人の特性に触れるならば、常に受動的態度であり、self-esteemが低い傾向にある。それに対して対照的なネットワーキング活動は、単に「主体性」という特色だけでなく、「地域（地理的に近い）」と「日常性（頻繁に合う）」という特色ももっていた。しかし、意外な結果であったが、ネットワーキングのメンバーは、心理的に近いサポータとして、母親に意識されなかった。これは、ネットワーキング活動が、母親の悩みを解決するためのものというよりも、母親が育児に対するアイデンティティをもち、悩みに対して積極的に対処できるような自信をつけさせてくれる、間接的な援助であることを示している。こうしたサポートのあり方は、公的な援助を考える際の鍵ともなるであろう。すなわち、上から（専門家から）ある一定の解決策を与えるだけではなく、その個人が自ら解決していくことを促すように援助していくことの必要性であり、それにはFace to faceという特性の他に、「地理的に近く」「頻繁に合う」という特徴が必要となる。

ソーシャル・ネットワークの特性でいうと、その数や種類が多ければ多いほど、ネットワーキング活動をしているとか、あるいは、サポータティブであるとは、今回の調査では必ずしも確定することはできなかった。しかし、育児上の問題を解決できないでいる母親は、ソーシャル・ネットワークが少ないということは実証的にも明らかにされた。地域や日常性という特性を備えたネットワークが重要であることは、親族のネットワークが機能していても、問題未解決の母親がいることから示唆している。母親の地域での社会関係の問題を、親族のネットワークだけで補うには、限界があるのである。親族の中でも夫は、サポータとして最も重要な存在であり、夫との関係が母親に与える影響は大きかった。しかし、その際に重要視されるのは、夫の実際の活動ではなく、それに対する母親の評価（認知）である。また、母親の夫への認知には、夫婦がどれほど会話時間がもてるかという要因が大きく影響し、当然のことながら、その時間が少ないと母親の不満も大きかった。子どもを育てるうえでは、たくさんの迷いが生じるのは当然のことであり、その迷いは誰かに話し、意見を聞いていく中で解決していく。たとえ、会話がもてている夫

婦であっても、その食い違いを納得するまで話し合っただけで了解をとっていたケースは少なかった。こうした実状において、ネットワークのメンバーは、母親の迷いの話し相手としても重要となる。しかし、育児においての基準がなくなっているのは、母親個人のレベルの問題ではなく、夫婦、家族のレベルにおいても言えることである。たとえば、夫婦での話し合いが十分に果たれていても、夫婦二人での迷いが生じる場合は多い。これは、現代においては、子育ての社会共通性がなくなっているためであり、家族と社会という視点からは、単に、夫のサポートを補うだけではなく、家族にとってソーシャル・ネットワークが必要なのである。

これら育児について検討をしていく上で見落とせない要因として、母親の感情の背後にあり、さまざまな形で影響を与えている母親のもつ育児観と女性としての価値観がある。本調査では、「他児との比較」が、最近の早期教育ブームを裏付けるように、子どもに習わせたいと思っている「希望の習い事の数」との関連があり、しかも幼児教育がターゲットとしている言語と認知の領域を重視する母親は、f2「育児不安」の高い群に多かった。しかし、習い事を始める動機の一つに、「子どもの友達を見つけるため」という理由も多く、「他児と比較する」ということが、単に母親個人の問題ではなく、社会的な要因も大いに影響していると予想される。一方、女性の生き方についての考え方は、f1「充実感欠如」の高低で違いがみられ、充実している母親の方に、女性が職業をもつことを肯定的とする母親が多かった。これらの結果は、f1が母親自身の生活に関連し、f2が子どもとの直接的な関わりの中から生じてくるということを裏付けている。

論文における最初抱いた問題意識としては、いわゆる育児不安の構造を探ることから出発したが、調査を通して明かとなったのは、育児をしている母親の地域における社会関係の存在形態である。育児をしている母親も様々なネットワークをもち、そこから生活への充実感が生じているのである。しかし反対に、地域におけるネットワークの貧しい、社会関係の乏しい母親の存在があり、そうした母親たちに「育児不安」が高くなる傾向があった。また、「充実感欠如」は低ければ低いほど望ましい、反対から言えば、高ければ高いほど望ましいという性質をもっているが、「育児不安」は全く無くなれば望ましいとはいえない性質をもっていると考えられる。健康な程度の育児不安は、母親であれば誰しももっているものであり、それを「無くする」というよりは、あるのが当然であり、それを「如何に解決するか、サポートするか」が重要となってくる。母親が元気でイキイキと子育てができるようにするには、まず母親の充実感を高める要因を整えることが重要であり、それによって育児不安も軽減できる可能性があると考えられる。

【引用文献】

金子郁容 1986 ネットワーキングへの招待 中央公論社

牧野カツコ 1982 乳幼児を持つ母親の生活と〈育児不安〉家庭教育研究所紀要, 3, 34-56.

本村汎・磯田朋子・内田昌江 1985 育児不安の社会学的考察——援助システムの確立に向けて——大阪市立大学生活科学部紀要第33巻, 231-243.

大日向雅美 1991 親としての発達 日本児童研究所(編)児童心理学の進歩 XXX 金子書房 Pp.153-179.